

ドバイ日本人学校での実践報告

前ドバイ日本人学校 教諭

埼玉県さいたま市立川通小学校 教諭 染谷 尚久

キーワード：三大大行事，現地校交流，生活科，1/2 成人式

1. はじめに

ドバイは、アラビア半島の最大の商業都市である。石油資源に乏しく、早くからリゾート開発や、外資系資本の誘致に力を注いでいた。数年前のドバイショックで景気は一時低迷したが、現在はかつての好景気を取り戻しつつある。あちらこちらでビル建設を行っており、建設ラッシュという雰囲気である。そのため、外国人労働者の数が急増し、不動産バブル再来の様相である。気候は緯度の割に気温が一年を通して高く、夏は50℃を越える。さらに湿度も高く、10分以上外にいと身の危険を感じるほどである。その反面、冬は日本の5月頃のような気候で暑くも寒くもなく、大変過ごしやすい。この時期にヨーロッパからの避寒地として多くの観光客が訪れる。目覚ましい繁栄ぶりと、戒律の厳しいイスラム教国の中ではめずらしく開放的な雰囲気を持ち合わせているため、「中東の香港」などと呼ばれたりもする。

2. 実践報告

(1) 教育課程

ドバイ日本人学校は、アラブ首長国連邦（UAE）を構成する7首長国（アブダビ、ドバイ、シャルジャ、アジュマーン、ウンム・ル・カイワイン、ラアス・ル・ハイマ、フジャイラ）のひとつ、ドバイ首長国の中心地近くにある。昭和55年にハマリアに開校、昭和62年にアルワスル地区に移転し、ドバイ教育局に認可されて「日本国総領事館付属の私立学校」として現在に至る。本校は平成25年度に開校33周年を迎えた。

現在、125名（平成26年2月27日現在）在籍している。ほとんどの子どもが、日本企業の駐在員の子女である。そのため児童の入れ替わりは多く、5年以上在籍する子どもは少ない。1年～3年程度で、帰国または他校に転校する子どもが多い。指導形態は、小学部から教科担任制を一部導入している。また、派遣教員は2～3年で入れ替わる。学校教育目標に「自主性、自立性、国際性」を掲げ、教育活動を行っている。教育課程は、日本の学習指導要領に基づき編成されている。日本と同様の授業を行い、さらに英会話を週に2時間、アラビア語を週1時間行っている。

(2) 三大大行事

「一生懸命がかっこいい」をキャッチフレーズに学期に1回ずつ計3回、全校児童生徒参加の行事を行っている。

① つながり合う音楽発表会

つながり合いを大切にして、毎年6月に低学年、中学年、高学年、中学部の4部構成で総領事、保護者の参観のもと体育館で発表会を行っている。それぞれの発達段階に合わせて指導を行い、この行事を通して音楽的情操を養い、学級学年づくりを行っている。どの子ども発表会に向けてめあてをもって参加し、一生懸命に音楽的活動に取り組む姿がすばらしかった。

② かかわり合う熱沙祭

「かかわり合い」を大切にして毎年10月に熱沙祭を音楽発表会と同様に4部に分かれて演劇発表を行う。音楽発表会で培った「つながり合い」を進化・統合し、それぞれの発達段階に応じた題材を夏休み前に選び、台本を作成し、配役や小道具・大道具を決定する。

背景画は2年前までは手描きであったが、教師の業務の効率化、背景の変化の簡易性等を勘案し、透過式大

型スクリーンを使用するようにした。大型プロジェクターでスクリーンの後ろから映し出し、場面ごとに背景を変化させることによって臨場感を高めることに成功した。

練習は3週間前から熱沙特別時間割を組み、毎日1時間練習するようにしている。2週間に短縮する案もしたが、質をある程度保証するためには3週間必要という結論に至り、現在も3週間の練習期間をとっている。毎年かわり合いを大切にした感動的な劇を披露している。

③みがき合う運動会

1年間の集大成として「みがき合い」を大切に、毎年1月に日本人会との共催で運動会を行っている。小学1年生から中学3年生までの縦割りで4チームを編成し、対抗の演技・球技を繰り広げる。中学2年生を中心にリーダーズを編成し、ダンスの作成やチームの役割を分担し、担当教員の助言指導のもと自分たちでチーム運営を行う。どのチームも一生懸命にダンスの練習や競技の練習をし、当日は本気の戦いを繰り広げる。笑いあり、涙ありの子どもたちにとって思い出深い運動会になっている。

(3) 現地校との交流

現地理解教育を推進するために、現地校との交流を年4回行っている。学年ごとに訪問校を決定し、合計7校との交流をしている。現地事情で連絡調整が難しく、交流先確保がなかなか難しい現状があるが、毎年実施している。

現地校に訪問し、一緒に授業を受けたり、文化祭に参加したり、よさこい踊りを披露したりした。また、現地校の児童生徒をを招待し、一緒に運動をしたり、切り絵や書道などの日本文化を紹介し実際に体験してもらったりと、有意義な体験活動をしている。週1時間学習しているアラビア語を実際に使うよい機会にもなっている。

交流会を通して、意思を伝えるためには、言語だけでなく伝えようとする気持ちや非言語コミュニケーションの大切だと実感させることができた。



【中学年の凧作り】



【高学年のすごろく】

(4) 生活科

生活科の授業でオクラ、落花生、とうがらし、アサガオ、ひまわり、さつまいもの種を植えて、生長を観察した。次のような生長が見られた

①オクラ

5月に種子を植えて、すぐに発芽した。その後、7月まで順調に成長したが50cm程の背丈で生長が停止した。通常なら花が咲き、実ができるのだが、花が咲かずに徐々に葉が落ちそのまま枯れた。再度8月に種子を植えたところ順調に生長し、花が咲き、実ができた。このことから、生長に対する適切な気温幅は広いが、開花に対する適切な気温幅は狭いこと、3か月程度で開花に適切な温度に至らないと開花せずに枯れることがわかった。収穫したオクラは現地スタッフ（スリランカ人）をゲストティーチャーに呼んでオクラのスリランカ料理を作り、試食した。どの子もおいしいと、自分たちで育てたオクラを喜んで食べた。また、異文化料理を堪能する

ことができた。

②落花生

オクラ同様、5月に植えた。順調に生長し、7月に花が咲き、10月ごろ収穫することができた。

③とうがらし

オクラ、落花生同様5月に種子を植えた。発芽までは順調だったが、その後1か月ほどで全滅した。高温に耐えられず枯れたことが予想される。

④アサガオ

5月に種子を植えて順調に生長したが、花が咲かなかった。枯れるものもあったが、酷暑を生き延びたものが涼しくなってきた11月頃、花を咲かせた。

⑤ひまわり

9月に種子を植えた。順調に生長したが、日本で育てたときのように背丈が伸びず、1mほどで花を咲かせた。

⑥さつまいも

11月に種芋（エジプト産、USA産）を鉢に植えた。2週間ほどで芽が出たので、それを切り取り、観察園に植え直した。また、UAE産の苗も植えた。どの苗も順調に育ち、3月に収穫することができた。細くごぼうのようなさつまいもが多かったが、なんとか収穫できてほっとした。

(5) 1/2成人式

学校教育目標の具現化のために、1/2成人式を計画した。成人式までのちょうど半分の折り返しの時期、そして4年生の学習のまとめの時期に、今までの学習の総決算としての行事として位置付けた。昔から節目を大切に子どもを育ててきた日本人の精神や考えに習い、人生の節目に自分を振り返り夢や生きる目標を考えることの大切さを子どもたちに伝えたいと考えた。子どもたちがこれからの生き方を考え、日本人としての自覚や誇りをもって歩んでいくことによって、自主自立の精神を培い、さらに国際人としての基礎を培っていきたいと考えた。

①職員会議提案

計画案を職員会議で協議し、共通理解及び協力体制作りを図った。

②道徳授業実践1

『啓発録』橋本左内（幕末の武士）著をもとに、道徳授業を行った。子どもたちは今年度10歳になる学年にいる。成人になる年齢のちょうど半分である節目の年齢である。10歳は、受動的な学習から能動的な学習に切り替わる時期である。10歳だからこそ「啓発録」のような考えを純粹に受け入れ、自分を振り返る指標にできると考えた。日本人の心にふれ自分を振り返り、夢について考える1/2成人式を創っていきたいと思った。

③道徳授業実践2

10歳という若い年齢ながらも、親の子どもに対する無償の愛について気づいてもらいたいという思いから、『美しい母の顔』という中学生が実際に書いた作文をもとに道徳授業を行った。

④1/2成人式実行委員

道徳授業実践後、1/2成人式実行委員会を組織した。役職は次の通りに分担した。委員長、副委員長、司会、招待状、呼びかけ、プログラム、音楽・装飾の6つである。実行委員会を昼休みに開き、1/2成人式の思いや構想を話し合い、プログラムの検討から当日の運営について協議をした。決定事項を学級会に下ろし決をとり、当日に向かって準備を進めた。当日、子どもたちだけで計画的に式を進めることができた。

⑤教科担任との連携1

将来の夢の発表のため、国語科担当との連携を図った。国語科の授業として1月に入ってから、400字詰原稿用紙1枚程度の作文を書かせた。下書き→清書→合格というステップで取り組ませた。合格した児童から暗唱に取り組ませた。当日、舞台の上で堂々と自分の夢を語る姿が見られた。年度初めから名文暗唱に取り組ま

せていたため、どの子どももしっかり覚えることができた。

⑥教科担当との連携2

リコーダー演奏や合唱の選曲、指導を音楽科担当と連携を図った。子どもに負担がないように第4学年で学習した曲の中から1/2成人式にふさわしいものを選曲した。短い練習期間にもかかわらず、完成度の高い発表ができた。

⑦他教員との連携

今まで担任や教科担当で直接指導を受けたすべての教員に招待状を送り、当日参観していただいた。特に校長には事前に日程等の調整を図り、当日証書授与をお願いした。子どもたちもお世話になった先生方に成長した姿を見ていただくことで意欲向上につながった。

⑧暗唱指導

年度初めから2週間に1作品を暗唱するように指導した。隔週末に作品を配り、週明けからテストした。先着5名をミニ先生に認定し、合格認定を与えられるようにした。ほぼ全員が2週につき1作品を暗唱した。本番までに全員が15作品連続で暗唱できるようになった。当日、10分間に渡り暗唱文を群読する姿は圧巻であった。

⑨保護者との連携

「思い出のスライドショー」を上演するために、児童の幼児期の写真を3枚提出していただくように学級通信をお願いをした。メール送付または写真原本提出という形で、協力していただいた。また、サプライズ企画として、保護者から児童への手紙贈呈を企画し、保護者に子どもへの手紙を書いてもらうように依頼した。式の3週間前、封筒に依頼文書と便箋を入れて児童経由で配付した。心温まる手紙を書いていただいた。

3. さいごに

ドバイでの生活は大きな財産になった。日本人会による学校運営、灼熱の夏、どこまでも続く砂漠、外気50℃の中でのスキー場やスケート場、シェイクをトップに常に世界一を目指した国家運営、人口の8割が外国人という特殊な人口構成、運転マナーの悪さ、日本人会での経験等、日本の生活では経験できなかった貴重な経験をさせていただいた。この貴重な経験を日本在住の子どもたちに還元し、夢をもち未来を切り拓く子どもたちのために職務に専念していく次第である。